



中日乡土玩具



田原画集



中日乡土玩具

田原画集

湖南少年儿童出版社

(湘)新登字 006 号

中日乡土玩具——田原画集

责任编辑 李昆纯 装帧设计 郦 渊

版面设计 尹香豫

湖南省新华书店发行

1994 年 12 月第一版 1994 年 12 月第一次印刷 印数: 1—3000

湖南少年儿童出版社出版

精一印刷(深圳)有限公司印刷

(长沙市东风路附 1 号)

889 × 1194 1/24 $8\frac{2}{3}$ 印张

ISBN 7—5358—0958—8 / J · 270

定价: 平装: 48.00 元 精装: 88.00 元

中日乡土情

要画这本画集的起因，是在1972年。那年我被借调到北京《人民中国》杂志社工作，任务是创作12幅版画，登载在《人民中国》上。住了一段时期，在社内交结了不少朋友，谈得投机的，是一位美术编辑李玉鸿，他出生在日本横浜。我是个民间玩具收藏迷，也迷恋日本民间玩具（日本称“乡土玩具”），因之，两人一谈就融洽。临别，他赠我一册日本《乡土玩具》集，并提议我画一批中日民间（乡土）玩具对照图，为《人民中国》作封面。

当时，我觉得他这个设想很好，也可增进中日友谊，回来就着手画。可是当时的“气候”不适宜画这类“四旧”，就束之高阁了。可是一搁就搁了20年。

我收集了不少民间玩具，包括日本的（还有许多玩具画册），有时取出把玩，发觉不少日本乡土玩具和我们的民间玩具十分相似，有的几乎完全一样。

日本的文化，受着我国的影响，是不用置疑的，尤其是书法，日本的书法家也很坦诚地说：“中国书法是我们书法的老祖宗！”这些日本乡土玩具，恐怕也不例外，也同样有这渊源关系。

比如老虎，日本的泥虎，和我国泥虎几乎是同一模子；还有大阿福、牛、马、猫、狗、竹蛇、车木娃娃、风筝等，都是大同小异。

中国的民间玩具，丰富多采，造型质朴稚拙，天趣横生。日本的乡土玩具也是极其丰富，土味十足。

中国民间玩具，我已画过《中国民间玩具》、《中国古代玩具》（此两册为外文出版社出版，有八国的文字版本）、《可爱的娃娃》（这册是英、法、西班牙文本）、《好乖乖》、《田原民间玩具画集》等数本，可是还没有画过日本乡土玩具。日本画家也有画玩具的，我手头就有一本《绘本の日本乡土玩具》，作者名木村友禧。我想这本中日对照的乡土玩具，一定会引起人们的兴味，日本人肯定也会喜欢的，为什么这样说呢？因为我着手画的时候，已经充满着喜悦！

田 原

一九九二年中秋

中日の郷土情

私の此の画集の描く縁起は、1972年に在る。その年、私が北京の「人民中国」雑誌社に借用されて、仕事は12枚の版画を描いて、「人民中国」に掲載することである。住んでいる間、社内で沢山の友人が出来、付き合いの馴染んだのが美術編集の李玉鴻さんで、彼の生まれ故郷は日本の横浜でした。私は民間玩具の収集ファンで、日本の民間玩具(日本語で「郷土玩具」と言う)にも未練がましい。それで、二人が話し掛けたら、すぐ睦まじくなる。別れ間際に、彼から私に一冊の日本「郷土玩具」集を贈られ、それに提言として、一揃いの中日民間(郷土)玩具対照図を描かせ、「人民中国」のカバーに使うと言う。

その時、彼の計画が素敵だと思い、中日友誼の増進にも利くだろう。そして、帰ったらすぐ描き始めました。しかし、その時の「政治的雰囲気」は、これら「四旧」を描くのに適せず、ついに、棚上げされました。さてさて、棚に上げること、忽ち二十年。

私は少なくない民間玩具を収集して、日本のも含む(数多く玩具絵本も)、偶に取り出して手に持って弄ぶと、少なくない日本郷土玩具と我が民間玩具との良く似ているのを見付け、或る者は殆んど全く同じだと見付かった。

日本の文化が、我が国の影響を受けているのは、疑いのないことであるが、就中、書道について、日本の書道家も率直に「中国の書道は私達の書道の先祖だ」と言われました。これらの日本郷土玩具も、恐らく例外でなく、同じく淵源関係が有るだろう。

例えば虎、日本の泥虎と我が国の泥虎とが殆んど同じ雛形から出来て、また達磨・牛・馬・猫・犬・竹蛇・木雛・鳳等、何れも大同小異である。

中国の民間玩具は豊富多彩、造形が素朴稚拙、天然趣味が溢れ出る。日本の郷土玩具も極めて豊富で、郷土味が十分である。

中国民間玩具について、私は既に「中国民間玩具」、「中国古代玩具」（この二冊は外文出版社によって出版され、八個国の文字に翻訳されました）、「可愛い雑」（此の本はイギリス・フランス・スペイン文に翻訳されました）、「良い子」、「田原民間玩具画集」等数冊描かれましたが、しかし、日本の郷土玩具はまだ描いたことがありません。日本の画家は玩具を描いたものもありますが、私の手元に「絵本の日本郷土玩具」一冊があり、作者は木村友禎先生。

この中日対照的郷土玩具は、きっと人達の興味を引き起すであろうと思う。なぜかと言えば、私の描き手初じめ頃、もう喜悦に満ちている。

田原 1992 年中秋

《中日乡土玩具》序言

俞 律

田原有一颗炽热的艺术家的心，还有一颗天真无邪的童心。

作为艺术家，他虔诚地守着中国传统的圣地，毕生翻滚跌扑在民间的泥土里。

小时候他学过京戏，直到今天还倾倒于中国戏曲的魅力，赞叹脸谱、髯口、靠旗、雉翎、水袖等等的妙用，熟记着锣鼓经和皮黄唱法，甚至每闻二黄摇板的第三句悲怆唱腔而洒泪；他深谙农村狮子舞，对于舞者如何前后搭配，如何左右逢源，至今津津乐道；他十分钟情于朴实无华的民歌，对洋味洋腔的假民歌嗤之以鼻；他崇拜中国象形文字一甲骨文，对于我们祖先对大自然的非凡观察力，创造出如此典型的中国文字，五体投地；而对于古典诗词，则每从“白发三千丈”这类极度夸张的诗句里汲取精淳的营养；又涉猎古典小说，研究张飞喝断桥梁使水倒流之类情节的艺术真谛；甚至连民间日常用语中的艺术成份也不放过；至于书画，正是在上述种种艺术涵养的滋润下思虑实践，废寝忘食，其精诚通于鬼神了。

田原的艺术实践旨趣，全在民间传统，传统植根于中国数千年历史沃土，民间是积累这种沃土的广阔天地。前年他在中央工艺美院讲学，曾对学生必修素描表示异议。中国艺术不是大自然的翻版，画得越像距传统精神越远。从前中国画家没有画过素描，如果让齐白石投考美院，会因素描不及格而落选，而他事实上是美院教授。可为教授而不可为学生，岂非怪事！

其实，他并不排斥美术的洋法，他是提倡借鉴的，举凡透视、色彩、质感、量感、空间感等，无不合理吸收，具体运用。他对传统是活学，不是死学。前人以为京戏有死唱活唱之别，不考虑剧情，千篇一律地死扣阴阳平仄和为情而唱是有大区别的。田原为艺，好比马连良活唱。

这特别印证于他的书法创作。他在山谷体上用过大功夫；却不以此为满足，又进而致力于板桥体；经营既久，遂洞悉其得失，改造其通篇中呼应不协调处，创造出一种比板桥体协调而贯以流畅之气的新体，是为田原体。

真正艺术家的肚皮是永远填不饱的，田原沾满墨汁和颜料的手还伸向玩具领域，让他的丹青去表现玩具的童贞。我确信，当他握笔面对他所深爱的玩具的时候，他的童心一定激烈跳撞着，这时他决不是个老人而是个最天真的孩子！

真正理解孩子心理和情趣的，往往是老人，因为老人不仅经历了童年，而且获取了童年的沉淀。田原特别佩服中国土玩具的设计和制作者——民间老艺人。齐白石认为中国画的妙处在于和描绘对象的“似与不似之间”。而田原说，齐白石笔下的“似与不似，”较之老艺人手上的“似与不似”，简直是小巫见大巫，田原本书所绘正是老艺人的种种杰作，请看老艺人做的玩具老虎，竟是这么个可爱的家伙！他们善良的手不但把老虎的凶恶抹掉，而且为之添上善良和美丽，然而它仍然是虎，孩子们在动物园里见过使他们心惊胆怕的虎，在家中却会情不自禁地把玩具老虎拥入怀中亲吻。

诚然，凡生活中可予以艺术加工的东西，他们都不放过。只要有泥、木、布、纸、竹、草、陶、瓷等材料，则龙、凤、麟、狮、蛇、马、犬、兔以及小娃娃、不倒翁、刀枪剑戟之类就以最妙的变形出现在玩具摊上。田原爱之如至宝，平生蒐集搜求数百之多。

无独有偶，日本也有位玩具迷，他就是民俗家伊藤三朗，他在1981年见田原出版的《中国民间玩具画集》，喜极来鸿，以后与田原隔海频频通邮，浩谈玩具，不亦乐乎。1984年田原有日本之行，得晤神交已久的伊藤，其后更经伊藤介绍，结识龟井金矿。他是日本玩具收藏家，将多年收集的日本玩具千余件通过田原赠送中国，中日玩具遂得亲密结缘交流。

中国老艺人制作的玩具，流传至今，统称“民间玩具”。而日本则名之为“乡土玩具”。田原颇欣赏“乡土”二字，以为较广义的“民间”一词确切。日本乡土玩具与日本其他民间文化一样，实渊源于中国，田原将中日玩具互为比拟，发现其中血脉处处相通，有志以彩笔予以系统再创作，适逢湖南少年儿童出版社组稿，于是竟一月之期，画成二百张，秃笔一枝，日夜挥洒，虽腰酸背疼而不废，如此为艺术呕沥心血，真值得钦佩。

田原画玩具，当然不同于为玩具拍照，而是以数十年研究、实践笔墨所得，图其形与神交叉处的要义，用笔纯属传统功夫，中锋着纸，或短或长或粗或细或涩或流，一切根据情与理的所需，决非率意而为。譬如玩具受光的一面以细线描写，背光则用粗线；泥、布的作品，用涩的线条；瓷品则以滑表现之。凡此种种，一律精心构思，既坚持传统，又吸收西洋画法的明暗色彩等处理。至于线条之凝练，笔墨之酣畅，全在数十年基本功力的丰厚了。

今日玩具正日趋现代化，小火车是大火车的缩影，小老虎是真老虎的化微，前者可以叫模型，后者不过是标本。孩子玩的是实物而不是玩具，从小培养他们的西方艺术感觉，置东方艺术于何地？田原出版此书，实为对传统的提倡，俾民间乡土工艺，不至湮没。田原的女儿曾对她父亲说：“爸爸的画怎么总是土里土气的？”田原大笑说：“我追求的正是这个土字。这个土不能湮没的！”所以他制闲章曰：“一往情深”，曰：“酩酊”，曰：“为伊憔悴”，曰：“土气息泥滋味”，曰：“乡巴佬”等，就是恋着这个土字。

田原已届古稀，依然努力不懈。生也有涯，时光自要抓紧。他对我说：“传统艺术太丰富了，人要能活到二百岁才好。我现在弓起背，为后人搭一座不像样的桥。让后人在我背上踩过去，我也是心甘情愿的！”

1992.8.15

「中日の郷土玩具」序言

俞 律

田原さんは灼熱な芸術家的な心、また天真無邪気な童心の持ち主である。

芸術家として、彼は恭しく中国の伝統的な聖地を守り、一生を掛けて民間的泥土の中を転がした。

小さい時、彼は京劇を習ったことがある。今日まで、なお中国戯曲の魅力に傾倒している。彼は「臉譜」・「髯口」・「靠旗」・「雉翎」・「水袖」(何れも京劇の服装・道具)等の妙用を讃嘆し、鑼鼓經(銅鑼と太鼓の鳴らす方)と皮黃(西皮・二黃共に京劇の重要曲源)の歌い方を熟記し、延いては、二黃搖板の第三句の悲愴な歌い方を聞く毎に涙を零し、彼は農村の獅子踊りを深く諳んじ、その踊る者が如何に前後相協調して、如何に自由自在に踊る等、今になっても興味深くそれを楽しむ。彼は十分に素朴無華な民謡に情を集め、舶來品の偽民謡に対し見向きもしない。彼は中国の象形文字——甲骨文を崇拝している。彼は我れら先祖の大自然に対しての非凡的な観察力が、典型的な中国文化を造り出したのに感心で極まりない。古典詩詞に対し、時々「白髮三千丈」等の極めて誇張した詩句から、清純な養分を汲み出し、古典小説をも涉獵し、張飛の「喝斷橋梁水倒流」(「三国演义」)等の筋の芸術的な眞諦にも研究に勵み、延いては、民間日常用語の中の芸術成分まで手放さない。書画に至っては、正に上に述べた通り、彼は種種様様な芸術的涵養の潤いの下での思慮実践に、寢食を忘れ、その真心が鬼神にも通じるようになった。

田原さんの芸術的実践の趣旨は、全く民間伝統にある。伝統は中国数千年の歴史の地味の肥えた土地に根差し、民間はこの沃土を累積する見渡すかぎりの天地である。一昨年、彼が中央美術学院で授業していた時、曾て生徒のスケッチを必修課目とすることに対し、異議を示した。彼の主張は、中国の芸術は大自然の焼き直しではなく、描いたのが本物に似れば似るほど、伝統精神と遠ざかる。昔の中国画家は、スケッ

を描いたことがない。若し、齊白石に美術学院に入学試験でもさせるなら、スケッチの不合格で落第に決っている。がしかし、事実、彼は美術学院の教授である。教授に成れるが、生徒に成れない。可笑しいではないか。

実のところ、田原さんは美術上の西洋の描き方を排斥しないどころか、むしろ彼は参照を提唱している。凡そ透視・色彩・質感・量感・空間感等、合理的吸収と具体的に運用しない所がない。彼の伝統に対する態度は活用で、機械的模倣ではない。前人は京劇が「死唱」（機械的模倣）と「活唱」（活用）の別があると認定し、ドラマの筋も考えず、一本調子で「陰陽平仄」（古典詩文・戯曲の音律）を死守するのと、筋の為に歌うのとは、大なる区別がある。田原さんの芸術観は、馬連良（中国著名な京劇演芸家、四大名生の一人。馬派老生の創始者・代表的人物）の「活唱」と良く似ている。

これが特に彼の書道作品に証拠されている。彼は「山谷体」（黄庭堅、号山谷。北宋后期詩人。書家としても、宋代四大家の一人。）の習得に大いに勵んだ。が、それに満足せず、また更に「板橋体」（鄭燮、号板橋、清代書画家・文学者）に勵み、経営に時間が積み、遂にその得失を悉く察知出来、その全篇の中の呼応の不協調な処を改造し、一種の「板橋体」より協調、しかも流暢で貫く新体が、「田原体」である。

正真正銘の芸術家の腹が何時も空く。田原さんの墨と絵の具だらけの手が、また玩具分野に伸し、彼の丹青で玩具の童貞を表現している。彼が筆を執って、彼の深く愛している玩具と向き合っている時、彼の童心がきつと猛烈に波打っていると確信している、この時の彼は決して老人ではなく、一人の最も天真爛漫な子供である。

本当に子供の心理と情趣を理解する人は、往往にして老人である。何故かと言えば、老人は童年時代を経験したばかりでなく、しかも童年の沈殿物まで獲得しました。田原さんは殊に中国玩具の設計者と製造者——民間老師匠に敬意を持っている。齊白石は中国画の妙な処は、描く対象物との「似る似ないの間」にあるだと見ている。田原さんの言う所では、齊白石筆下の「似ると似ない」、老師匠手許の「似ると似な

い」のと、全く比べになれない。田原さんのこの本で描いたのは、正に老師匠の色々な傑作である。老師匠の作った玩具虎を見てご覧、こんな可愛いやつじゃないか。彼らの善良な手が、虎の凶悪を拭き落したばかりでなく、しかも虎に善良と美麗を添え付け、しかしそれは依然虎で、子供達が動物園で見た彼らを怯えた虎を、知らず識らず玩具虎を抱いて接吻する。

成程、すべて生活中的芸術的加工の出来るものは、師匠達は何れも手放さない。泥・木・布・紙・竹・草・陶・瓷等材料さえあれば、竜・鳳凰・麒麟・獅子・蛇・馬・犬・兔及び子供・刀・槍・剣・戟(中国の古代兵器)等、最妙な変形で玩具棚に并べる。田原さんはこれらを至宝の如き愛し、畢生をかけて、数百まで収集された。

ただ彼一人ではない、日本にも玩具ファンがいた。彼は民俗学家の伊藤三郎である。彼は1981年に出版された田原さんの「中国民間玩具」を見付け、喜ぶの余り、それから海を隔てて、頻りに文通して、広く玩具のことを語り合い、楽しみが何より。1984年、田原さんが日本の旅があり、親交久し振りの伊藤さんと出会い、つづいて更に伊藤さんの紹介で、亀井鉦さんと付き合うようになりました。亀井さんは日本玩具收藏家で、彼の長年に互って收藏された日本玩具千余个を田原さんを通じて中国に贈り、遂に中日玩具が親密に縁を結び、交流が出来た。

中国の老師匠の製作された玩具は、今日まで広く伝わって、すべて「民間玩具」と稱するが、日本では「郷土玩具」と名付けた。田原さんは「郷土」二文字を頗る賞賛し、広泛な意義を持つ「民間」二文字より定かだと思う。日本郷土玩具と日本その他の民間文化が同じく、実は中国に淵源しているので、田原さんは中日玩具を互いに比較して、其の血脈が到る処に相通ずるのを見付け、それで彩筆を執って系統的に再創作を志し、恰かも湖南少年兒童出版社から原稿の約束があり、一個月を費やし、ついに二百枚描いた。筆一本で、昼夜を分かたず、腰と背が痛くても休まない。芸術の為、こんなに苦心慘憺な方に対し、誠に感心の至りである。

田原さんの玩具描きは、言うまでもなく撮影とは違う。彼は数十年

の研究と実践を重ね、その筆墨の心得で、形と神との交叉點要義を絵く。筆の運用は全く伝統的思慮をめぐらすもので、筆が紙に着くと、或は短く、或は長く、或は太く、或は細く、或は渋く、或は滑らか、すべて情と理の必要で、決して軽率に為すのではない。譬えば、玩具の光線の当る面は、細い線で描き、光線の当らない面は、太い線を用いる、泥と布の作品は、軽い線を使い、瓷品は滑らかで表わす。これら一切、何れも緻密に構想の上、伝統を譲らず、又西洋絵き方の明暗・色彩等の取り扱いも吸収する。線の老熟、筆墨の酣暢に至っては、すべて数十年の基本的修業の豊厚にある。

今日、玩具は正に現代化に趨向している。小さい汽車は大きい汽車の縮影で、小さい虎は本物の虎の微型化である。前者は模型と言えるが、後者は標本に過ぎない。子供の遊んだ物は実物で、玩具ではない。幼い時から彼らに西洋芸術的感覚を培うなら、東方芸術を何処に置く。田原さんのこの本の出版は、確かに伝統に対する提唱にあり、民間郷土工芸を湮没に至らしめないためでもある。田原さんの娘が曾てお父さんにこう言ったことがある、「お父さんの絵は、どうして何時も田舎者のようですか」。すると、田原さんは大笑いして言った、「僕の追求しているのは、正にこの『田舎者』だ。これが湮没してはいけない。」だから、彼の雕刻した印章に「一往情深」・「酩酊」・「為伊憔悴」・「土氣息泥滋味」・「鄉巴佬」等、皆この「土」（田舎者）を未鍊がましい。

田原さんは古稀の年に届いても、依然として努力を疏かない。生命は果てがあるから、光陰を重宝している。彼は私に言ったことがある、「伝統芸術は極めて豊富であるから、人が二百歳生きればいいね。私は今背中を弓のように縮んで、後人にみっともない橋を掛けて、後人に私の背中を踏ませて通らせるのが、私の心からの願いだ。」

1992 年 8 月 15 日



安徽土人形



香川高松紙糊出嫁女



陕西土人形母と子